

十日町市上野の昭和九年建築の 第二藤巻医院本館

Research of the Main Building of Fujimaki Clinic Built in 1934, Tokamachi City ,Niigata Prefecture

宮澤 智士
MIYAZAWA Satoshi

キーワード: 地域医療施設
木造洋館
昭和初期建築
町医者

Keywords : community clinic
wooden building in western style
built in 1934
general practitioner

The Fujimaki Clinic is located on the main street in Ueno, Tokamachi City. The main building was built in 1934, and it is the first Western style building in Ueno, having Western style exterior, examination room, staircases, and hallway, however, its six sickrooms and nurse's break room are Japanese style with Tatami mats.

Unlike typical Japanese structures, which are built very close to the street, the clinic site is surrounded by stone walls and the main building is recessed with some distance from the street. Moreover, large lotus flower, or oval shaped stones are used for the front wall. The size of stones becomes smaller as the wall approaches the rear of the building.

The clinic has supported people of the community. The clinic is, needless to say, important as a cultural asset because its site, main building, and stone wall have not been renovated since 1934.



図1 第二藤巻医院診察室まわりのデザイン

一 序 説

1-1 上野村最初の洋風建築(図1、図2)

第二藤巻医院は新潟県十日町市上野に所在する(2005年4月1日の市町村合併前は中魚沼郡川西町上野)。当医院は、小千谷市真人の藤巻医院長藤巻敏太郎医師の実弟藤巻力雄医師が、大正九年(1922)十二月八日に、上野集落中央部の街道沿い、現上野交差点の南西角で医院を開業したときに始まる。その後、上野集落の北端に近い街道沿いの現位置に土地を求めて洋館建築の医院を建てた。この新たな医院建築は上野周辺では最初の洋館建築であり、昭和九年(1934)十月に竣工した。建設にあたった棟梁は明らかでないが、大工は長岡から来ていたようである。

この洋館を建てるにあたって、藤巻力雄医師は、昭和七年(1932)に盲腸炎にかかって臥床している間に、新築する医院の構想を練りに練って計画、建設したと伝えている。昭和九年に新築なった洋館は、建築以来、現在までの間に、背面突出部の水まわりや、この周辺に改造された個所があり、いくつかの部屋の使い方は建築当初と変わってきている。豪雪や地震などによる被害をうけた個所の修復はあるが、この外建物自体は特別に大きな改造や増設を加えることなく現在にいたっている。

多少の改造や変更はあるものの、現存の洋館建築そのものや、関係者からの聞き取りによって、当医院の建築当初の姿やその後の変遷経過、さらに藤巻力雄医師が当医院を建築するにあたって熟慮した設計意図、建築計画を復元的に読みとることができる。

1-2 地域医療施設としての藤巻医院

藤巻医院と称して藤巻家一族が経営する医院・診療所は、当地域に3か所あった。最初の藤巻医院は小千谷市真人で大正元年(1912)に開業した。この藤巻医院は現在も営業している。2番目は、今回ここでとりあげる十日町市上野の第二藤巻医院で、大正九年に開業した。3番目は、昭和十一年(1936)七月十七日に開業した十日町市千手の藤巻医院千手出張診療所である。当出張診療所は平成十五年(2003)に閉鎖した。これらの3医院・出張所は、主要地方道小千谷十日町津南線の沿線南北10キロメートル足らずの距離内に所在し(図2③)、地域医療に貢献してきた。

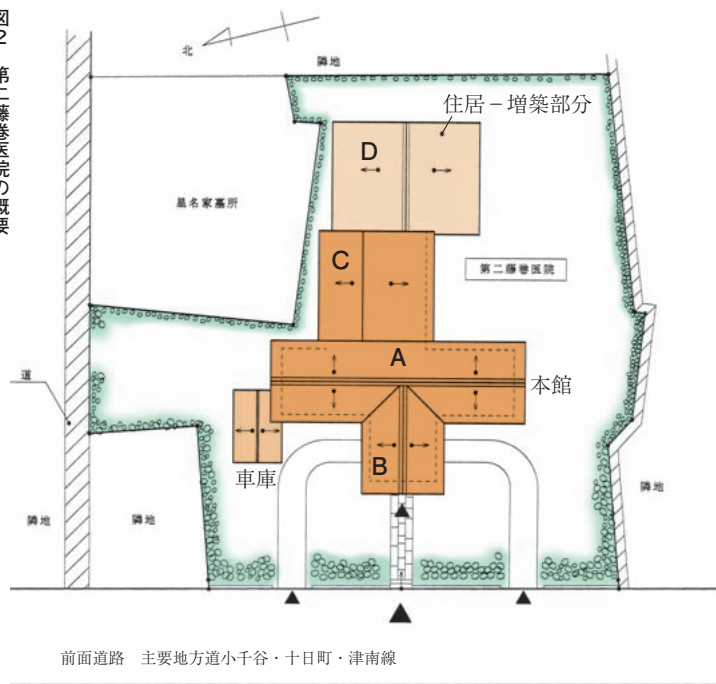
第二藤巻医院を開業した初代藤巻力雄医師は明治二十七年(1894)三月生まれ、二代目の長男藤巻定則医師は大正十三年(1924)二月生まれである。親子ともに多くの診療科目に対応する町医者であり家庭医でもあった。特に初代力雄医師は、長岡病院(現長岡赤十字病院)のレントゲン科の創設に係わっており、当医院にも当時医学最新のレントゲンをを用いて診察にあたった。上野にかぎらず遠方からも患者がやってきたという。

東京で産婦人科を開業していた長男藤巻定則医師が、昭和六十年(1985)に二代目院長を継いだ。この間、豪雪地帯であるこの地区が、無医師地域になることを恐れた父親と故郷の人々の涙ぐましい強い要望があって、親孝行の帰郷が昭和四十六年(1971)の暮れに実現したのである。この間の事情は昭和四十七年(1972)一月四日付の読売新聞「にっぽんの人間指数」で詳しく紹介されている。

第二藤巻医院は「医者どん」と愛称され、地域の人々に親しまれた。大正九年(1920)の開業以来、当医院は上野を中心とした地域の医療につくすとともに、上野小学校の校医を長年月にわたって務めた。地域住民の誰しもが一度は当医院の世話になっているといわれる。

なお、藤巻医院千手出張診療所は、信濃川発電所建設にさいして怪我人が多く出たこともあって開業したという。外科の非常勤医師をおいたが、専任医師をおかず第二藤巻医院の医師が兼務した。看護婦数人が常駐していた。

図2 第二藤巻医院の概要



①配置図



②空からみた第二藤巻医院 (十日町市提供)

◀◀③藤巻医院の位置関係 ○印は、第二藤巻医院の最初の位置

◀④地域医療に従事した藤巻力雄さん(前)と定則さん(後)
出典：読売新聞 昭和47年1月4日号



⑤第二藤巻医院付近の町並み—左側の樹木が茂るところが医院



⑥第二藤巻医院本館の南側面と敷地をかむ石垣



①二階病室のランマ窓が開く



③車寄せ天井の漆喰が落下し木摺があらわれる



②診察室・手術室外壁にヒビが入る



④車寄せに落ちた天井の中心飾り、漆喰落下



⑤会計・受付の壁面にヒビが入る



⑥診察室天井の漆喰落下



⑦手術室天井の漆喰落下



⑧診察室の器具等が散乱



⑨洗面所の外壁の破損状況



⑩便所・洗面所の土壁がこわれる



⑪待合所前廊下の混雑

1-3 中越地震による被害とその復旧

第二藤巻医院の本館である洋館は、木造二階建てで、十字型の平面を形づくっている。平成十六年(2004)十月二十三日に発生した中越地震に遭遇して被害を受けた。この被害で、車寄せや診察室、手術室など天井の漆喰が落ち、漆喰塗り壁の一部が崩れ、ひびが入った(図3)。しかし、木造の構造体そのものに及ぶ大きな被害はなかった。漆喰天井が落ちた原因は、下地の

木摺の間隔が狭すぎて、漆喰の足が下地の木摺りに十分に喰いこんでいなかったためと考えられる。この3年後の平成十九年(2007)七月十六日に中越沖地震があったが、この地震による被害は軽微であった。当医院の洋館は地震にも耐えてきた。

中越地震で被害にあって破損した箇所を復旧して医院は再び開業するのだが、その後、藤巻定則医師が高齢であることもあって、平成二十年(2008)現在、医院は休診中である。



①本館正面の「第二藤巻医院」の文字



②本館正面の全景



③前面道路からみた本館正面左半部



④本館正面右半部



⑤雪の本館側面を南から遠望する



⑥前面道路に面する大きな石をもちいた石垣

1-4 第二藤巻医院の評価と課題

昭和九年（1934）建築の第二藤巻医院本館は、上野近辺における最初の洋館建築であり、地域医療の拠点施設としての役割を長年にわたって果たしてきた。多くの医院が鉄筋コンクリート造の建物に建てかえる現況にあって、木造の当院の本館は、大きな改造や増設をすることなく現在にいたっており、昭和九年（1934）建築当時の状況をよく伝えている。そこには、院長であ

り設計者でもある初代藤巻力男医師の地域医院建築に対する意向が強く反映していると考えられる。

当医院の本館は、全国的にみても現存する昭和初期の医院建築として、数少ない貴重な建築遺構とおもわれる。将来にわたって当医院は、保存しかつ活用をはかる必要があると考える。保存、活用に関しては、今後、所有者、関係者等とじっくり相談する機会をもちたい。

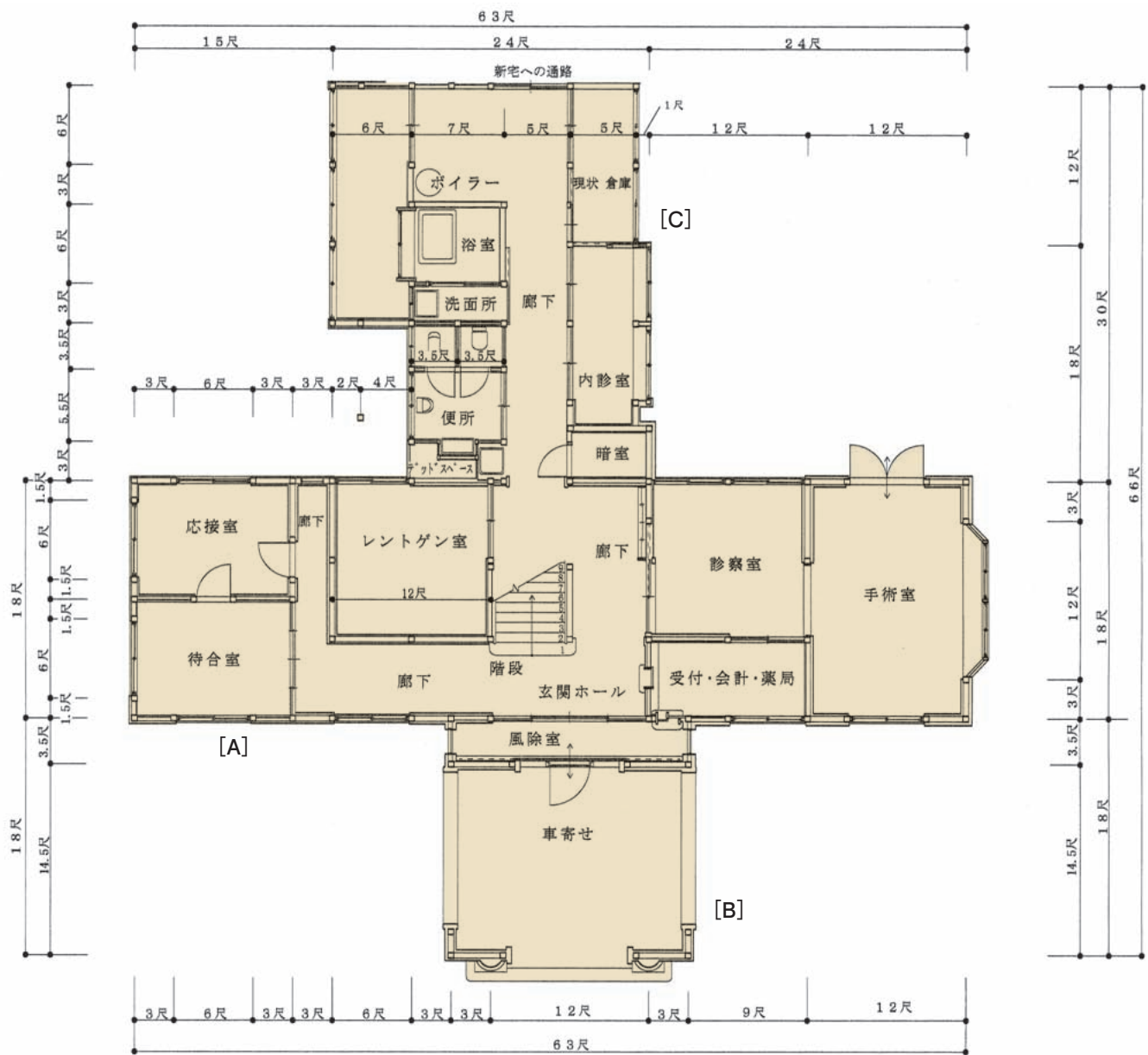


図5 第二藤巻医院本館一階平面図

二 第二藤巻医院の敷地と配置

第二藤巻医院の敷地は、上野集落の北端近くにあつて、十日町から小千谷に通じる街道の東側に接し、西を正面にしている(図2①)。

敷地の形は、間口よりも奥行きがやや長い長方形の、北西と北東の両隅を欠いた形態、言い換えれば、長方形の北辺の中央部に張り出しをもった凸字型である。

敷地内には洋館の本館がほぼ中央部に建ち、現在は本館の背後に、平成八年(2009)に建て替えた居住棟が接して建ち、直接、本館と行き来できる。この他、前面街道から入りやすい本館の北西角に車庫が建つ。車庫は比較的新しい建物である。

敷地の周囲は、西前面が街道、南面が小道を隔てて隣地、背面になる東が隣地の畑地、北側の突出部の北面には前面街道から通じる道路が通り、北西隅の欠けたところには現在他家の車庫(図2⑤左から2棟目の青いかまほこ型建物)が建ち、北東隅の欠けたところは他家の墓地である。敷地境界は石垣・石列をもって区画している。境界の石垣の多くは、「蓮華積み」と称する特徴ある積み方が採用されている(図4③～⑥)。この「蓮華積み」石垣に関しては当研究紀要の別稿でとりあげている。

上野の集落は、街道の両側に間口が狭い敷地があり、道路に面して町家風の家々が軒を接して建って町並みをつくっている

(図2②⑤)。この中であつて、第二藤巻医院の敷地は間口がやや広く、他の家々と異なり、前面の街道に面した石垣の内側に車まわしのある庭園をつくり、前面街道から奥まって本館を建てている。

第二藤巻医院は、昭和期になってから、上野集落の北端にあたる位置に医院の敷地とする土地を求め、昭和九年(1934)に医院本館を洋館として建て、ここに引越をしたのである。

三 第二藤巻医院の本館

3-1 十字形の外観

本館は、木造の伝統的な軸組を基本にした二階建てで、全体の平面、外観は十字型をなしている(図2①②、図4①～⑤)。十字型の構成は三部分からなり、十の字の横棒部分を南北に棟をもつ主体部[A]とし、この前面と背面のほぼ中央に東西に棟をもつ突出部[B]、[C]をつくる。屋根は建築当初、切妻造、瓦葺きであったが、現在、屋根葺き材はすべて鉄板に変わっている。背面突出部[C]の屋根は他より一段低く、その棟は主体部[A]の軒下に納まっている。

外壁は白モルタル仕上げとして、各壁面にガラス窓を規則的に開ける。主体部[A]の南側面の一、二階の中央部にそれぞれ出窓(バーウィンドウ)を設ける。正面中央の一階に車寄せを

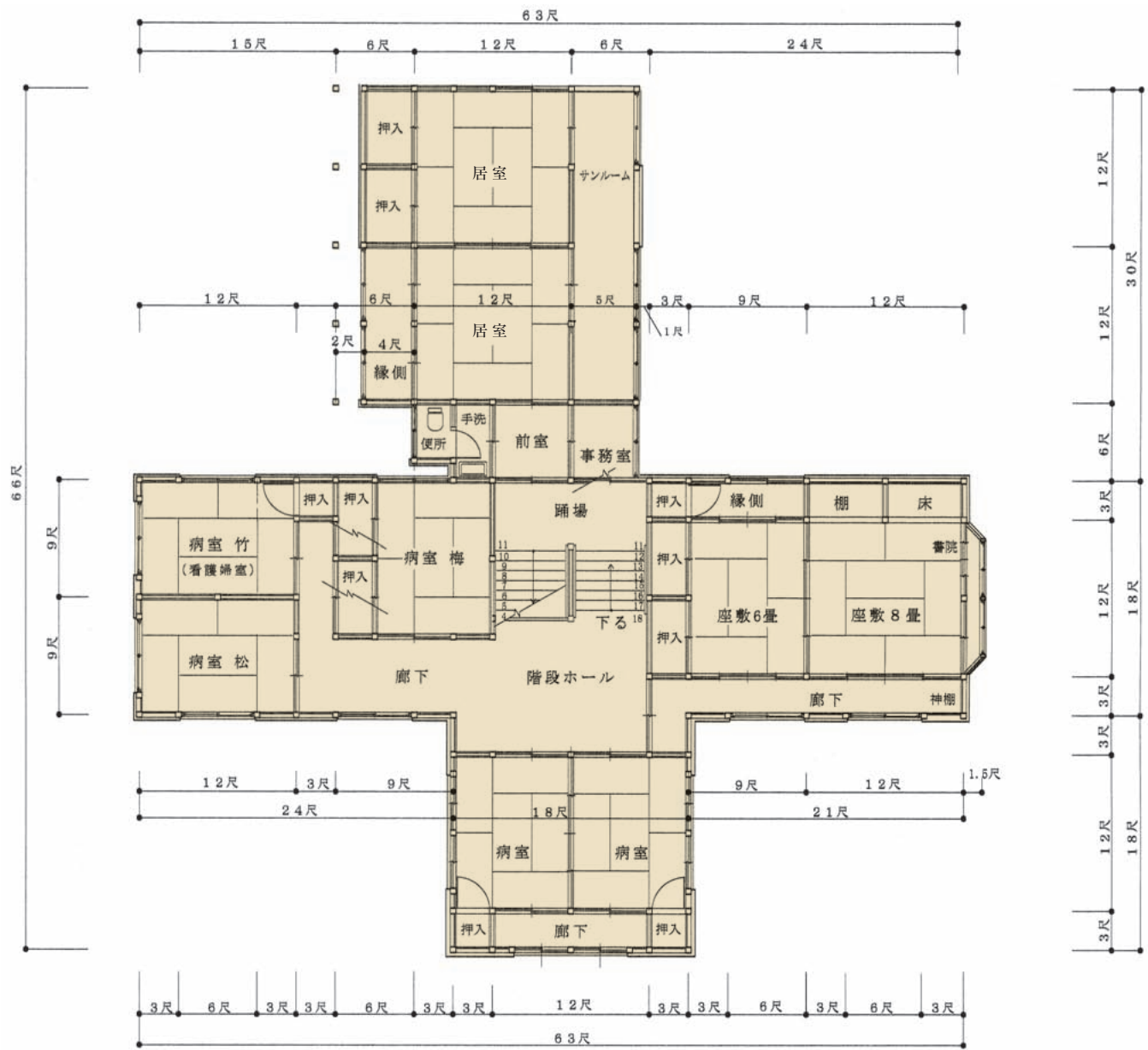


図6 第二藤巻医院本館二階平面図

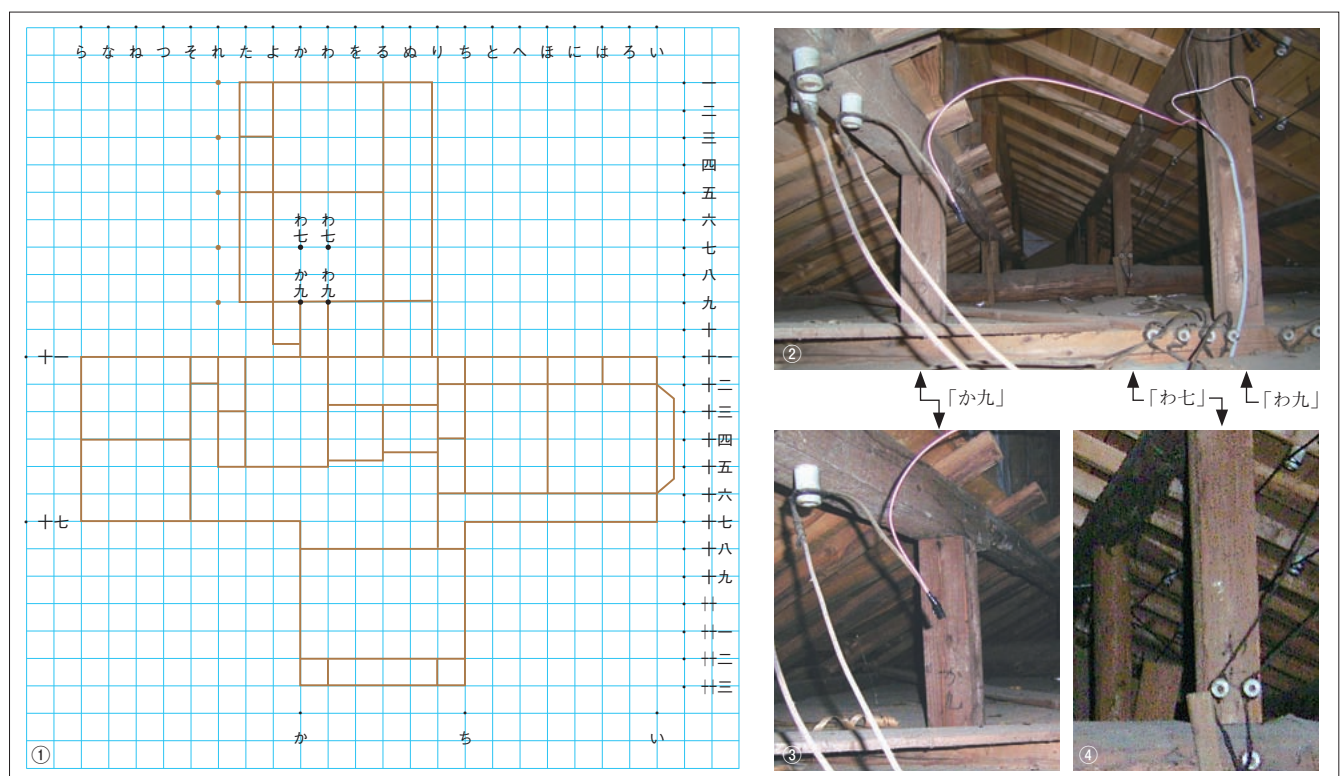


図7 第二藤巻医院本館の建築当初番付(推定)①と小屋束の番付墨書写真2点②③

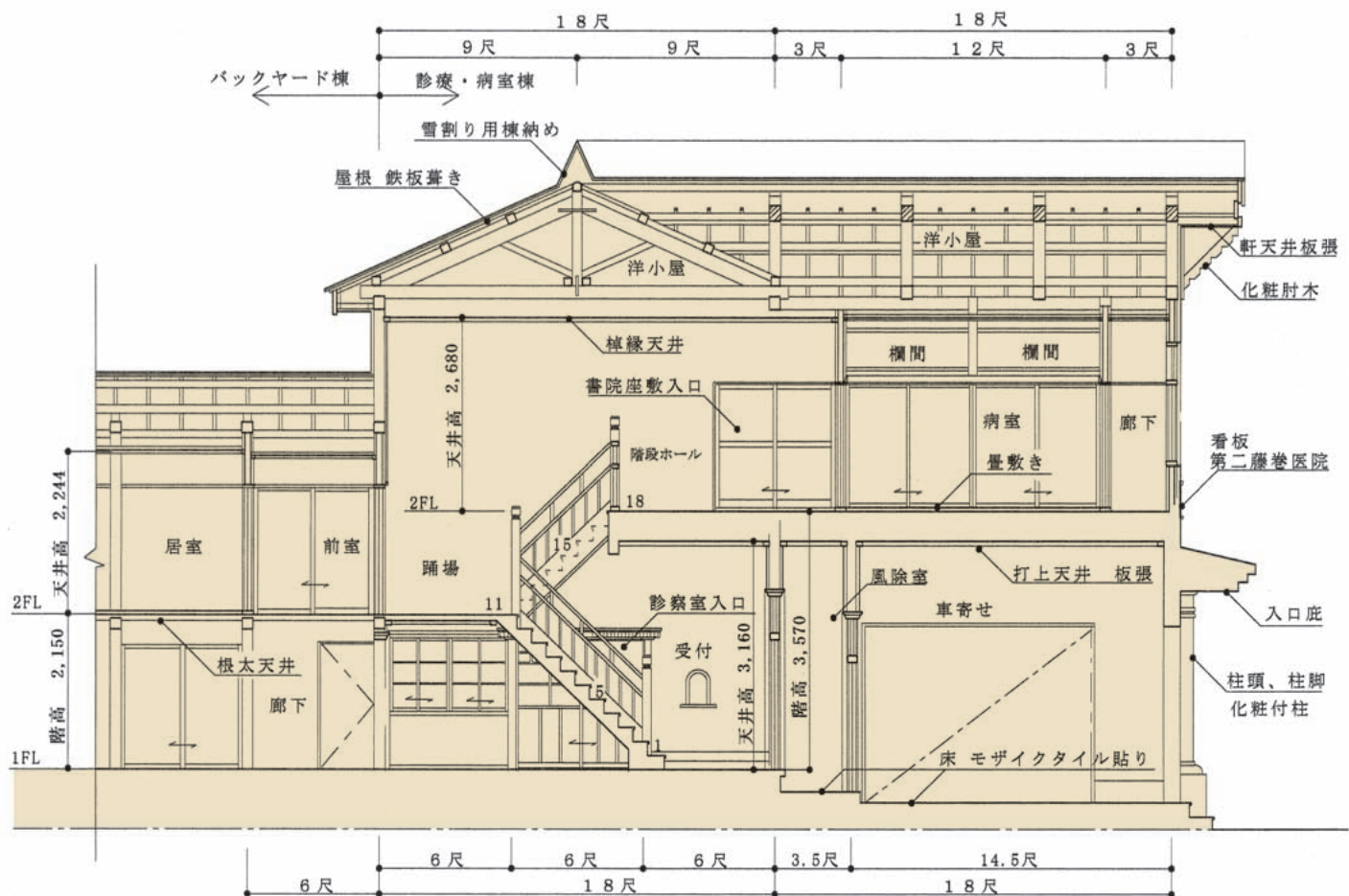


図8 第二藤巻医院本館断面図(東西)

設けて正立面（ファサード）を左右対称にして外観を洋風につくる。なお、各部、各部屋内部の洋風にみせる細部のあつかいに関しては後に記す。

3-2 本館の建築当初「番付」の発見

今回の調査中に、建築当初とみられる番付の墨書が背面突出部の小屋束からみつけた。この番付の分析によって、十字型の建物全体が一体の建物として計画され建設されたことが明らかになった。

背面突出部の小屋裏を撮影した写真の棟束、小屋束に番付とみられる墨書があった(図7②③④)。詳細にみると、棟束の墨書は「わ九」、この半間北に立つ小屋束のものは「か九」と読みとれた。これらの1間束に立つ棟束、小屋束の墨書はそれぞれ「わ七」、「か七」と読める。これら4か所の墨書から番付は、「いろは」と「一二三」の組合せ番付であることが推定された。

この番付を実測平面図に書きいれて、「いろは」を横軸(X軸)、「一二三」を縦軸(Y軸)として半間(3尺)単位の方眼座標を想定すると、東南隅を起点「一一」として北に「いろは」と進み、西つまり表方に「一二三」と下がる座標によくあてはまる。つまり、第三象限にのる「下がり番付」であることがわかる。

この番付にしたがうと、主体部の南側通りが「い」通り、北側通りが「ら」通りとなる。漢数字は背面突出部の東端通りが「一」、ここから西に下がって前面突出部の西端通りが「二十三」になる。なお、主体部の前面、背面通りはそれぞれ「十七」、「十一」通り、棟通りは「十四」になる。また、前面突出部の南側は「ち」、北側は「か」通り、背面突出部の棟通りは「わ」通り、上屋筋の南側は「る」、北側は「よ」通りになる(図7)。

「いろは」と漢数字「一二三」を組みあわせる組合せ番付は、

江戸時代後期以来、一般的にもっともよく用いられた番付である。当本館の十字型平面の建物では、前後左右の4隅を欠いているので、ここ部分には実際の建物はない。このように実体のない箇所にもまで及ぶ座標を組む考え方は、番付のもっとも発達した段階にあることを示している。この番付の存在によって、当本館の全体が一体の建物として建てられたことは疑いない。

3-3 本館の設計寸尺と規模

本館には上でみたとおり、半間=3尺を単位とした方眼座標の番付が打っており、建物はこの方眼座標上によくのっている。建物の実測調査によっても、寸法計画は6尺を1間とする江戸間であることが明らかになった(図5、図6)。このように本館は尺貫法によって建築されており、その数値はきれいな完数(ラウンドナンバー)になるので、以下の説明では尺貫法(間・尺・寸)を用い、必要に応じてメートル法に換算することとする。

本館の規模は、主体部[A]の桁行(南北)63尺・梁間(東西)18尺、正面中央の突出部[B]は桁行・梁間とも18尺、背面突出部[C]は桁行30尺・梁間最大21尺である。ただし、背面突出部[C]の建築当初の上屋の梁間は12尺で、その南北両面に4尺5寸の土庇が付き全体で21尺であったと考えられる。

上にしめした数値によって建築面積を計算すると以下の通りである。(文中の[A][B][C]は図2①配置図参照)

主体部[A] 10.5間(63尺)×3間(18尺)=31.5坪

前面突出部[B] 3間×3間=9坪

背面突出部[C] 5間×3.5間=17.5坪、

上屋部分 5間×3間=15坪

合計 建築面積 58.44坪(192.85㎡)

出窓パーウィンドウ(2間+1.5間)÷2×0.25間=0.4375坪



①診察室－東面をみる



②診察室－北面



③手術室南面－正面にベアウインドウ



④手術室東面－正面に外への出入口がある



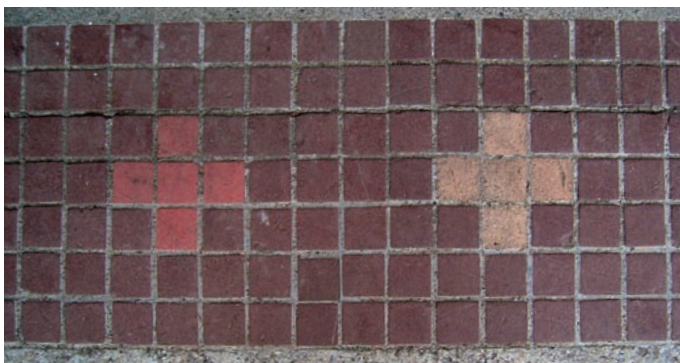
⑤手術室－右手にベアウインドウ



①階段まわり（二階手摺ごしにピアノの裏側）



②車寄せの柱脚(上)、同タイル張りの床の部分(下)



③前面の廊下から待合室をみる



④前面の廊下から受付・会計・薬局をみる



⑤受付・薬局内部一薬局部分



⑥階段の踊り場下から入る診察室



⑦受付・薬局内部一流しや棚などがある



①仏壇がある次の間から本座敷をみる



②床・棚・書院の座敷飾りがそろった本座敷



③本座敷から次の間、前面の廊下をみる



④次の間―正面に置き仏壇

3-4 本館の平面の内容

一階は、正面中央に車寄せと車寄せに続く風除室が突出し、ここから入ると正面に玄関ホール、二階へ昇る階段がある。これらの左手に一間幅の廊下があり、この奥に待合室(古くは待合所といった)と応接室が前後に並び、この2室と階段の間にある部屋は、当初はレントゲン室であったが、現在は倉庫になっている。玄関ホールのすぐ右手には、受付・会計・薬局の機能を合わせもつ小部屋(以下、受付と仮称する)と、この背後にある診察室とが前後に配置され、これら2室の奥は広い手術室である。以上が一階主体部[A]と前面突出部[B]の平面である。

階段の背後からバックヤードである背面突出部[C]の中廊下に通じている。この突出部の中廊下に沿って左側に便所、洗面所・浴室、ボイラー室と炊事場が並び、これらの左背後の底部分に、後の増築になる細長い部屋がある。突出部の中廊下の右手の底部分には、階段室に接して建築当初からある暗室、続いて後世に設けた内診室、倉庫が並ぶ。背面突出部[C]の背後に、現在は平成十六年(2004)に再建した居住部[D]が接して建つ。

以上にみる通り、一階は、前面突出部[B]を車寄せと玄関にあて、主体部[A]に受付、待合室、応接室、診察室、手術室、階段などを配し、背面突出部[C]には、右手に暗室・内診室など、左手に便所・浴室とこれにともなう設備を配している。

二階は、階段を昇りきると階段ホールで、この左手は廊下に

沿って松竹梅の病室3室が一階の部屋割りと同様に並び、前面突出部[B]の車寄せ上に病室2室が左右に並ぶ。病室は計5室あり、みな6畳敷きである。住込み看護婦の個室として二階の病室を使っていたことがあった。階段ホールの右手は、書院造の座敷で、押入などをともなった6畳の次の間と、床・棚・書院の座敷飾りを構える8畳の本座敷の2室が並び、前面に半間幅の廊下を通す。この書院座敷は藤巻家の私室としているが、病室が混みあった際には病室として使ったこともあったという。

背面突出部[C]の二階は階高が主体部[A]より一段低く、ゆか高を階段の踊場と同高の7尺強(2.15メートル)にしている。まず、踊場に接して前室があり、この前室の左右に事務室と便所を配する。これらの背後に、前後に並ぶ和室が2室あり、建築当初は家族の居住室であった。最近看護婦休息室・同食道等にあてていた。これら和室の左手に縁側と押入、右手に増設のサンルームがある。上記のように背面突出部[C]の各部屋は建築当初と現在とは使い方が異なっている。

以上にみる通り、二階は、主体部[A]の左半と車寄せの上の前面突出部[B]を病室、右半の書院座敷を藤巻家私室、背面突出部[C]をバックヤードにあてていた。

3-5 洋風デザインの表現

外観の洋風的な要素とその表現については前で記した。ここで



①応接室—やや洋風



②和風の病室—竹の間



③二階病室前の廊下—正面は松、右側は梅の間で和風



④背面突出部一階の最後部から前方の廊下の方をみる—民家風

は内部の各部各部屋の洋風の細部手法、仕上げなどについて記す。

本館の軸部は伝統的な木構造によっている。この中に洋風の表情をもつ部屋つまり洋間は、おもに主体部〔A〕・前面突出部〔B〕の一階に集中している(図1、図10)。すなわち、階段まわり、応接室、診察室、手術室、廊下である。洋風にみせる手法として、ドア・窓まわりの角柱の表面に繰り方のある額縁をそえて、壁を大壁造りにして漆喰仕上げとし、天井を漆喰仕上げ、または板天井とし、ゆかは板張り、手術室はタイル張りとしていた。窓はガラス窓で腰よりも高い位置にあり、掃出し窓などは設けない。柱に繰り方をもつ額縁や、半円柱を添えてペンキ塗りとする。このように洋風にみせる手法は教会堂にもみられる。上野在住で第二藤巻医院のもと看護師によると、中越地震の被害によって破損する以前の診療室、手術室の天井は洋風の立派な漆喰天井であったという。

これに対して、主体部〔A〕の待合室、二階の5室の病室、書院座敷は畳敷き、竿縁天井とした和風の手法になる和室である。看護師によると、待合室には以前コタツが切っており、応接室は畳敷きであったという。

背面突出部〔C〕の各部屋は畳敷き、竿縁天井、中廊下は板敷であって、天井を根太天井とし、和風ないしは民家風の構造手法によっている。

次に小屋組をみると、主体部と前面突出部の小屋組は洋小屋で、キングポストラスを採用している(図14)。ただし、陸梁の断面が大きい。陸梁断面が大きいのは従来からの和小屋の構造手法の影響があったからと考える。主体部と前面突出部が洋

小屋であるのに対し、背面突出部〔C〕の小屋は和小屋組である。

3-6 後世の建物の改造

建物の改造は、屋根葺き材を除くと、主体部〔A〕、前面突出部〔B〕では少なく、部屋割りを変えている箇所はなく、内装などの改造があるにすぎない。やや大きな改造は背面突出部〔C〕にみられる。

背面突出部〔C〕は梁間2間とし、この南北両面に出4尺5寸で、屋根が一段低い土庇が付く形態であった。ただし、庇のうち南側の主体部と入隅になる部分には五尺幅の暗室が設けられ、二階居室の北側東端には1間幅の押入があった。この土庇は、北側の主体部〔A〕との入隅で便所北側になる個所を除いて、後世に室内に取り込む改造がおこなわれた。この際に庇の屋根を本体と一体の切妻形式に変え、葺き材を瓦から鉄板に変えた。

その後、切妻形式であった屋根の南の流れを北に長く延ばして棟をつくることを止め、北側の庇部分の屋根をのこして片流れ風に改造した(図7②)。この改造は豪雪に対処するためであった。同時に主体部〔A〕と前面突出部〔B〕の屋根も積雪に対処するために、大棟の頂を鋭角の三角形に改造して、大棟に積もる雪が容易に左右に分散するようにした。

3-7 洋館を建てた職人たち

洋館を建てた大工など職人に関しては、文献、伝承などの資料がなく今のところ不明である。ただ、敷地をかこむ石垣は、上野に近い集落である伊勢平治の石工羽鳥富太郎が積んだ。表



図 13 本館背面突出部の民家風廊下―表から奥をみる。奥から表を見返す(右)



図 14 本館主体部の洋小屋

側の石垣の内側に築かれている石の庭園も同氏による(藤巻先生撮影の富太郎の写真がある。当研究紀要の別稿参照)。なお、伊勢平治の石工は3代続いており、富太郎は2代目であり、3代目の幸蔵は中越地震のさいに破損した石垣の修理をしている。石工幸蔵は本年(2009)5月に83歳で現役を退いた。

大工に関しては今のところ詳しいことは不明であるが、前記のとおり、棟梁は長岡の大工であったようである。

まとめ―本館を建築計画の視点からみる

第二藤巻医院本館は、初代医師藤巻力雄の基本設計によって建設された。今回のまとめでは、第二藤巻医院の医師であり設計者である藤巻力雄が、設計にあたって工夫したと考えられる点をおもにとりあげたい。

医院に直接かわる人々は、患者(外来・入院)と医師・看護師、事務員、賄い等である。これらの人々の動きを、まず建築計画の視点からみてみよう。

藤巻一族関係の医院は3か所とも、最初は既存の民家を利用し医院として開業した。本稿でとりあげている当第二藤巻医院も、最初は既存の民家を借りて大正九年(1920)に開業したが、開業の15年程後に新たな敷地をもとめて医院専用の洋館の本館を建てた。ちなみに小千谷市真人の藤巻医院は、18世紀中頃の建築とみられる茅葺きの中門造り民家(自宅)に改造をくわえて医院とした。この民家建築の医院は現在も現役である。藤巻医院千手出張診療所も民家で開業したが、廃業した現在では医院の建物は取壊され、跡地は駐車場に変わっている。

既存の民家に代わって新たに第二藤巻医院を建てるのにさいして、医院専用の建物として、まずは洋館建築を選んだ。そして建物は木造で、その平面の機能性、ゾーニング、動線、さらに環境を重視して十字型平面の二階建てとした。

建物の配置は、敷地と前面街道との位置関係から主要な入口を西側にとり、入口前に車寄せ、前面街道との間に車まわしをつくった。本館の入口を入るとすぐ前が階段、右手に受付がある。外来患者は入口から入ってまずは受付に行く。受付が済むと左側の廊下の突きあたりの待合室にむかう。医師は受付の背後の診療室で診察する。診察には看護師が付き添っている。診察室の南側に手術室がある。手術室は南側にベアウィンドーを広くあけ、正面側にガラス窓、背面側に両開きの出入口を開く。開口部を広くとる点は現在の手術室のあり方と異なる。床と腰を白色のタイル張り、壁面と天井を白漆喰塗りとした。

入院患者は二階のある和室の病室で臥床している。便所は一、二階とも階段の裏手にある。ただし、二階の便所には階段を半

分降りて踊り場から行く。浴室は一階の便所奥にある。看護婦休息室は、本館背後に居住棟[D]が建てられてからは背面突出部[C]の二階の和室があてられた。医師の休息などは、居住棟[D]あるいは二階の書院座敷があてられた。

ゾーニングをみると、一階は、主体部[A]で昼間の医療行為がおこなわれる。背面突出部は便所、浴室など水まわりのあるバックヤードである。二階は、前面突出部と主体部の左半が病室、右半は私的な書院座敷、背面突出部はサービスヤードである。

建物を十字型にし、二階建てにしたことで、ゾーニングがうまくでき、動線が短くなった。また、豪雪地帯の当地では、冬季は一般的に一階より二階の方が居住性がよいのだが、この点も一応の解決ができた。

建築構造はきわめて合理的であって、間仕切り筋が一階と二階で一致していて構造的なバランスがよい。また、洋風と和風とは、内装仕上げや細部を変えて区別している。

昭和初期建築の当本館は、洋館として地元で認識されているが、明治時代の洋風建築や擬洋風建築とは異なっている。昭和初期当時、伝統的軸組みを用いたこのような建築は、近代建築として学校建築、公共建築、事務所建築などで多く建てられていた。当本館はこのような建築の内の1棟であるが、平面計画、構造計画など建築計画には大いに意が用いられていることは上に記した通りである。

あとがき

今回の調査にあたっては多くの方々にお世話になった。ここに記して謝意を表したい。

藤巻定則夫妻、藤巻幹夫(定則氏従兄)、渡辺正範(上野)、富井敏(上野)、丸山秀子(上野)、羽鳥幸蔵(石工・伊勢平治)、安井妙子あとえ(仙台、図面作製)

【参考文献】

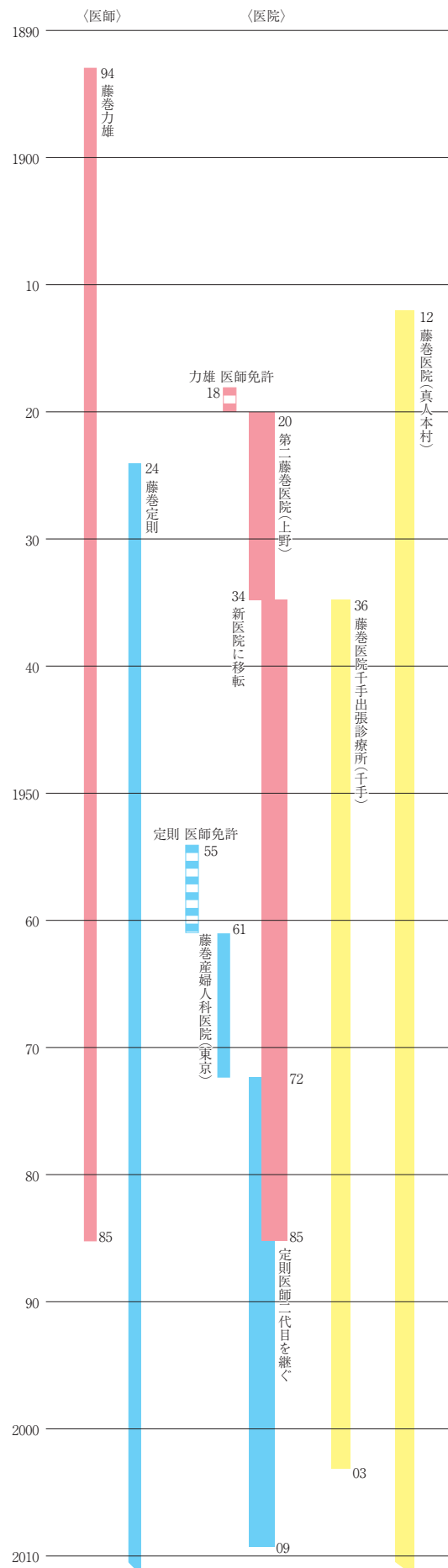
- ・川西町・同教育委員会 1986・87『川西町史』資料編・通史編
- ・十日町市総務課広報広聴係編 2007『中越大地震十日町市記録集 あしたへ語り継ぐ10・23 未来へのメッセージ』新潟県十日町市
- ・藤巻茂夫 1979『嘯月画集』(『嘯月』は藤巻茂夫の父親の画家の雅号・本名 藤巻直治(1878～1937))

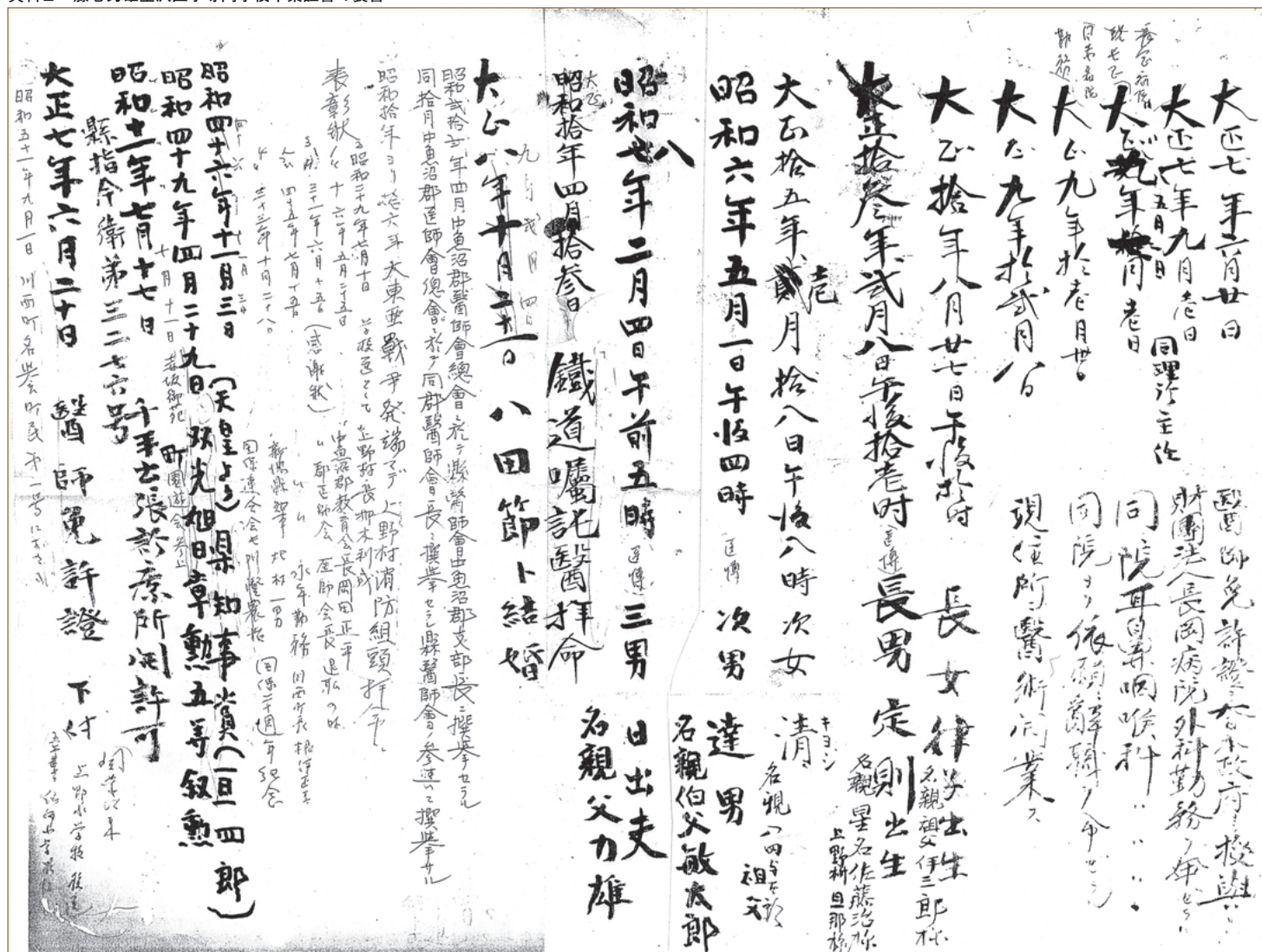
【注】

中越大地震マグニチュード6.8 川西町震度6弱、上中越沖地震マグニチュード6.8 川西町震度5弱。

資料1 第二藤巻医院年表

1868	明治元	江戸時代から明治時代になる
1894	明 27.3.16	藤巻力雄、小千谷市真人本村で生誕
1912	大正元	藤巻力雄兄敏太郎、真人本村で藤巻医院開業
1918	大 7.6.20	藤巻力雄医師免許証。(財)長岡病院勤務
1920	大 9.12.8	藤巻力雄医師上野村で第二藤巻医院開業
1924	大 13.2.8	藤巻力雄医師の長男定則誕生
1926	大 15.12.25	改元して昭和になる
1932	昭 7	力雄病床で第二藤巻医院新築計画を練る
1933	昭 8	新築医院の石垣積み始める
1934	昭 9.10	新築医院の本館竣工なり移転
1936	昭 11.7.17	藤巻医院千手出張診療所を開設
1945	昭 20.8.15	第二次世界大戦で日本降服
1955	昭 30.8.25	藤巻定則医師免許。看護婦養成所・保健所 相模病院等就任後、本田病院産婦人科勤務
1960	昭 35.1.25	定則医師結婚。同年 11 月長男誕生
1961	昭 36.7	定則医師、東京都荒川区西日暮里で 藤巻産婦人科医院開院
1970	昭 45	医院本館背後に接して住居建築
1971	昭 46.12	定則医師産婦人科医院閉院し上野に帰郷
1972	昭 47.1	定則医師第二藤巻医院勤務。
1974	昭 49.4.29	藤巻力雄医師双光旭日章勲五等叙勲
1976	昭 51.9.1	藤巻力雄医師川西町名誉町民第一号
1985	昭 60.10	力雄医師死去。定則医師第二藤巻医院辞任 新たに第二藤巻医院開院し第二代目を継ぐ
1989	昭 64.1.7	改元して平成になる
2003	平 15	藤巻医院千手出張診療所を閉鎖
2004	平 16	医院本館背後の住居を建て替え新築
2004	平 16.10.23	第二藤巻医院中越地震で被害うける
2008	平 20	宮澤智士、第二藤巻医院の建造物調査開始
2009	平 21	第二藤巻医院休診
2010	平 22.1	第二藤巻医院本館・石垣の登録文化財申請





資料3 看護師からの聞き取り

第二藤巻医院に長年にわたって勤務した経験をもつ看護師Aさんから、第二藤巻医院、藤巻医院千手出張診療所に関して聞きとりをおこなった。以下に、聞きとった要点を書きあげる。

① Aさんが勤め始めた昭和四十一年頃は、第二藤巻医院に入院する患者はすでにいなかった。昭和四十一年から四十六年までの間、Aさんは当院の病室の1室である「竹の間」を宿舍として住み込んだ。

② 当院には看護婦・医療事務員3人、自動車運転手1人、食事掛り1人の勤め人がいた。この内、食事掛りの方は、医院の家族をふくめ、医院に勤める人の昼食の世話もした。

③ 定則先生の病気入院、そして中越地震の災害で医院を休診した後、再診を始めた平成十七年七月一日から同二十年六月三十日までの3年間は、看護師の仕事とともに医療事務にかかわる仕事もAさんが一人でこなした。

④ 第二藤巻医院と藤巻医院千手出張診療所とに先生方は次のような割りふりの勤務をした。つまり初代力雄先生と定則先生との2人がおられた昭和四十七年から同六十年の間は、月水金、火木土と先生方は一日交替で千手出張診療所に通った。力

雄先生が亡くなった昭和六十年後は、定則先生が一日おきの午前中に千手に通った。両先生とも、何科と区別することなくあらゆる患者の診療にあたった。なお、上野の医院と千手出張診療所の間は歩くと40分ほどかった。

⑤ 往診は毎日三〜四件程あった。冬の積雪時の往診は道路事情が悪く大変であった。車で行けるところまで行き、そこから先生は患者宅まで歩いて行った。往診のさい、患者宅で昼食などを用意していることも昔はあった。

⑥ 定則先生は平成十五年九月二十日に病気になり入院し、翌十六年十月二十二日に退院された。退院した日はちょうど中越地震が発生する前日であった。医院はこの地震で被害をうけた。定則先生の病気入院、退院直後の地震のため、平成十六年の1年間は休診となった。休診が長引き、診療の再開は平成十七年七月一日になった。この3年後の平成二十年六月三十日に、先生が高齢になったこともあって、第二藤巻医院は休院する。

⑦ 昭和四十五年に本館背後に住居を新築する。以前は本館内で家族もくらしていた。この住居は中越地震のあった平成十六年に建て替えて、現在の住居になった。初代の力雄先生は二階の車寄せ上の病室、書院、座敷、家族は背面突出部の二階和室を使っていた。